

全体会午後部 I

司会者 それでは定刻が来たので着席してください。

ただ今より、全体会午後部 I を行いたいと思います。午後部 I の司会を担当させていただきます八万中学校 2 年の g, 松茂中学校 3 年の d です。よろしくお願いします。

本年度の全体会は、前半の I と後半の II の 2 部構成になっています。最初に意見発表を 3 本していただき、その内容を通して、みなさんで人権について語り合いたいと思いますので、みなさんどうぞ協力をお願いします。

まずは前半 1 本目の意見発表です。松茂中学校 3 年 a e さん「『部落差別』について」です。よろしくお願いします。



「『部落差別』について」

松茂中学校 3 年 a e

「部落差別」それは、人の心から生まれた絶対にあってはならないものです。現在も地域によっては根強く残っています。今からそんな「部落差別」について、母から聞いたことを基に、僕が考えたことをみなさんに聞いてほしいと思います。

僕は、森口先生に誘われ、「人権を語り合う中学生交流集会」に参加しました。そこではさまざまな人権問題に対して、真剣に中学生が語り合う姿がありました。そのことをリ



ビングで両親に話をしているときでした。部落差別についてのことを僕が話をしていると、母が次のようなことを教えてくれました。

「私とお父さんが結婚するとき、お父さんの両親は、私がどんな人なのか近所の人に聞きに来ていた。」とここまでのは、なんとなく納得がいったのですが、次の瞬間、その納得は消え失せました。なぜかという、「聞き合わせをする人の中には、部落ではないかと、近所の人に質問する人もいる。」と話していたからです。その話を聞いたとき、「なぜ部落出身なのかを聞く必要があるのか。」という疑問がわいてきました。それと同時に、「部落出身だったら何か問題でもあるのか。」という少し腹立たしい気持ちになったのを今でもしっかり覚えています。

僕の祖父母は、部落に対して差別意識があったわけではありません。昔は、それが普通だったと言います。ただ、祖父母は慣習にしたがって聞いていただけだったのです。

昔の人たちは、部落について人一倍敏感で、部落について気にしすぎているのではないのでしょうか。だからこそ、その間違った考え方を浄化するために、若い僕たちが、正しい知識を身につけて、古くから残る差別をなくしていかなければなりません。

しかし、それは決して容易なことではありません。昔から根強く残っているものは、私たちの常識に定着してしまっている部分があります。そういった間違った常識をなくすた

めにも一人一人が人権学習を通して、良い人権感覚をもつことが大切になってくると思います。

僕の父方の両親の世代ように「部落」に対して間違った常識を教えられて育った人たちも、世の中にはたくさんいるでしょう。けれども、その人たちを悪として見てはいけません。祖父母の世代の人たちは、慣習に従っていただけであり、本当に悪いのは、そういった慣習だと思うのです。そんな慣習を生んでしまう、人の心が悪いのです。そんな心と一人一人が向き合っていくことが大切だと感じました。



差別には、いろいろな種類がありますが、どれも人の心をえぐるようなものばかりです。差別をして人を傷つけた人も、差別をされて傷つけられた人も、心がモヤモヤします。同じ人間なのに、互いを傷つけて、いやな思いをさせる。それは、あってはならないことです。人を見下し、自分を優れた人間だと勘違いする。そういったことが、人の心を汚していくことにつながっていると僕は思います。

これから、さまざまな経験を積んで、僕たちは生きていきます。その中で、生まれた地域や容姿などで人を見下し、差別をする人と出会うことがあるかもしれません。そんなとき、「あなたの考えは間違っている。」と、はっきり言えるような人になりたいです。そのためにも、常識を疑い、間違えた考えをしな

いように、普段の人権学習に真剣に、そして積極的に取り組んでいきたいです。

僕は、はじめ「部落差別」がどういうものなのか知りませんでした。けれど、学習を進めていくにつれて、人の心の恐ろしさについて知ることができました。もう二度と差別を起こさない。そういう強い気持ちをもって、これから生きていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

司会者 ありがとうございました。どうぞ元の席に戻ってください。

続いて、前半2本目の意見発表です。大麻中学校3年 a b さん「想いを受け継いで」です。よろしくお願いします。

「想いを受け継いで」

大麻中学校 3年 a b

皆さんは「ふるさと」と聞くとどのようなことを思い浮かべますか。僕にとっての「ふるさと」。それは、家族と一緒に暮らす温かいところ。コウノトリが空高く舞い、その下に広がる田園の景色。まるで未来までのぞけそうなおいしいレンコン。入浴中聞こえてくるネコがけんかをする鳴き声。友と共に汗を流し、バスケットボールを追いかけた日々。次から次へと大切な僕のふるさとがあふれてきます。



人権学習の時間、僕は詩人の丸岡忠雄さんが書いた「ふるさと」という詩に出会いまし

た。丸岡さんの詩からは、吾が子にふるさとの名を堂々と名のらせたい親の願いと叫びが聞こえてきました。そして、詩を読み終えたあと、僕の胸に突き刺さったのは「ふるさとを隠すことを 父はけもののような鋭さで覚えた」という一文でした。“けもののような鋭さ”この言葉を初めて耳にしたとき、言葉では言い表すことのできない何ともいえない気持ちになりました。部落差別が丸岡さんをそこまで苦しめるのかと思うと、僕の心の中いっぱい“差別をなくしたい”という強い思いが広がりました。



その日、家族と夕食を食べながら、学校で部落差別について学習したことや、丸岡さんの詩について話しました。すると、祖父が、「丸岡忠雄さんのふるさと？ちょうど30年ぐらい前だったかなあ。おじいちゃんはその詩に曲をつけたんだよ。」と話し始めたので僕は驚きました。夕食後、早速祖父に曲を聴かせてもらいました。四分の四拍子のゆっくりとしたテンポで、全体的に静かな調子ですが、後半は感情の高まりを表すような旋律の動きで構成されていました。メロディーが二十五小節のため、タイトルは「二十五小節のふるさと」にしたそうです。祖父は、丸岡さんの詩に心を打たれ、自分のできることで部落解放を訴えたいと、何度も手を入れ直し、作曲したそうです。そして、ある町の講演会でも、この曲に想いを込めて歌いました。

この話を聞き、30年以上も前からこの詩が

伝えられていたことに驚くと共に、作曲することが大好きな祖父が、この詩に曲をつけていたことや、差別をなくすために作曲に取り組んでいたことに、僕はうれしい気持ちになりました。作曲できる祖父を誇らしく思うと同時に、僕にもきつと何かできることがあると心から思いました。

今、僕が差別をなくすためにできること。それは、人権学習を通して学んだことや感じた自分の想いを家族や友人、周りの人たちに伝え、行動に移すことです。今までの僕は消極的で、自分に自信をもてていませんでした。

そのため、人権学習の時間も自分から意見を伝えることができませんでした。でも、伝えなければ何も変わりません。自分の想いを詩に表現した丸岡さんのように、その詩に曲をつけ、そのメロディーにのせ丸岡さんの思いを多くの人に伝えた祖父のように。僕も変わらなければと心から思いました。

みなさんも、今一度胸に手を当て、「ふるさと」とは何か考えてみてください。楽しかったり、うれしかったりした思い出がよみがえりますか。それとも、悲しかったり、悔しかったりした思い出がよみがえりますか。祖父は「ふるさと」を作曲した30年前と変わらず、今でも差別が残っていることがとても悔しいと言っていました。僕も、部落差別がまだ世の中に残っていることがとても悔しいです。全ての人が自分の大切なふるさとの名を、何の躊躇もなく名のることのできる社会にしていきたいです。そのために自分に何ができるか考え、それを行動に移していきます。

まずは祖父と共に「二十五小節のふるさと」を大麻中のみんなに伝えていきたいです。最近興味のあるギターを抱えて。

ご清聴ありがとうございました。

司会者 ありがとうございました。

続いて、前半3本目の意見発表です。城ノ内中等教育学校3年a dさん「哲ちゃんの生

き方をまなんで変わったこと」です。よろしくをお願いします。

「哲ちゃんの生き方をまなんで変わったこと」

城ノ内中等教育学校 3年 a d

私は、自分が大嫌いです。性格も容姿も、全てが嫌いです。嬉しいことがあったとき、それを相手に伝えたいのにうまく言葉にしたり、表情に出したりすることができない自分。そんなこと思いたくないのに、「この子のこと苦手だな」と思ってしまう自分。人見知りの自分。友達のことをうらやましく思ってしまう自分。そんな自分のことで悩む日々を、私は送っていました。しかし、哲ちゃんのことを知ってから、私の考え方が変わりました。まるで世界が少し明るくなったかのように。



私の心を突き動かしたのは、哲ちゃんの「おじぎ草」という短い詩。

「夏空を震わせて 白樺の幹に鳴く蝉に
おじぎ草がおじぎする 包帯を巻いた指で
おじぎ草に触れると おじぎ草がおじぎする
指を奪った『らい』に指のない手を合わせて
おじぎ草のように おじぎした」

哲ちゃんこと、詩人の桜井哲夫さんは、17歳のときから、ハンセン病療養所で過ごしてきました。目が見えず、ペンを持つ指まで「らい菌」に奪われた哲ちゃんは、点字を打つことさえもできません。この哲ちゃんの「おじぎ草」に出会ったとき、私には到底感じることのできない気持ちだったので、驚きとともに

に疑問の気持ちでいっぱいになりました。哲ちゃんにとって「らい」は、苦しい毎日を送るきっかけとなったもので、「らい」によって多くの人やものを失いました。そんな「らい」に感謝して手を合わせるなんて、私には絶対にできません。なぜ哲ちゃんは、こんなふうに関心、詩に綴ることができるのでしょうか。

「おじぎ草」を知ったのは、金正美さんが書いた「しがまっこ溶けた」という本ですが、その中には、哲ちゃんのたくさんの言葉が紹介されています。

「俺はね、自分の顔に誇りを持つてるの。この顔には、苦しみや悲しみがいっぱい刻まれてるのね。またそれを乗り越えてきたという自信も刻まれてるの。だからね、崩れちゃってはいらんけど、いい顔なんじゃないかな。だってこの味わいは、俺にしか出せないものでしょ。」

哲ちゃんのこの言葉を聞いたとき、「この世の中に、私は私しかないんだ」と思いました。世界にはたくさんの人がいて、たくさん違いがあつて、哲ちゃんのように全然違うものを持っている人もいて、けれどこの世の中に、その人はその人だけしかいません。この容姿で、この性格で、こんな感情を持っているのも、世界で私しかいません。私はこれからも、何かを目指して今の自分を嫌いになったりすると思うけれど、バリアを張って仮面をかぶったままでいなくても、ありのままの自分であるのもいいのかな、と思うことができました。哲ちゃんのメッセージを受け取って、これまで思ってきたことが少し変わっていくかもしれないと感じました。少しの変化のようにも思えますが、私にとっては、大きな一歩です。

私は、ハンセン病問題について、まだ少しのことしか知りません。しかし、哲ちゃんの人生は波瀾万丈で、家族と離れ、病気による痛みや不安だけではなく、まわりの人からの

差別など、想像できないほどの苦しいことがあったと思います。らい予防法による隔離政策や、ハンセン病回復者の人々に対する差別は、絶対にあってはならないことです。「らい」を恐れ、自分や大切な人のことを守りたいという思いがあったのかもしれませんが、本当のことを知らないことは、差別につながってしまいます。今の私たちが生きる世界にも、多くの情報があふれていますが、私はその中から、正しい情報を選び、二度と同じ過ちを繰り返さないように、正しい選択をしていきたいです。



重い後遺症や社会からの厳しい差別の中にあっても、哲ちゃんは、周りの人に対して感謝の気持ちを持ち続けていました。見えない世界の中で、たくさんの趣や幸せを見つけ、自分の人生を楽しんでいるように感じました。私は、「ありのままがいい」という哲ちゃんの視点で、私自身のことを見つめました。これまでのつらかったこともくやしかったことも、すべてが今の自分につながっているのなら、私は、それがいいことじゃなかったとしても、与えてくれたことに感謝したいと思います。そして、これから出会う様々な人やできごとに対しても、自分が望むようなものではなくても、きちんと受け止め、哲ちゃんのように様々な視点で考えることで、少しずつプラスに変えていきたいです。

はじめに、「世界が少し明るくなった」と言いましたが、私は哲ちゃんの生き方を考え

ることで、自分を知り、ありのままの自分でいたいと思えるようになりました。そして、哲ちゃんが「らい」に感謝したように、私の周りにいてくれるすべての人たち、私をつくってくれたすべてのできごとに対して、感謝の気持ちを忘れず過ごしていきたいです。

ご清聴ありがとうございました。

司会者 ありがとうございました。どうぞ元の席に戻ってください。

それではこれから、意見発表を通しての討議にうつりたいと思います。発表についての感想や意見交換、参会者のみなさんの思いを語っていただければと思います。また、マイク係として、松茂中学校1年のhさん、藍住中学校1年のiさんの2人がフロアをまわります。なお記録の関係上、発表する人は学校名、学年、名前を言ってから発表してください。それではよろしく願います。

松茂中学校3年 b 私は、部落差別のことなんですけど一時身近に感じるものがあって。おじさんが結婚する時に、祖父とか祖母が部落の差別のことにちょっと何か言ったりして。それを聞いてて、さっきのa eさんが読んだ作文の通り、やっぱり祖父母もそういう感じだったのかなって思います。それとか、一回家族と差別、部落差別のことについて話した時があって、その時に何か父が、学校の授業で初めてそういう差別があるって知った



んだったら、じゃあ何でそういう授業で部落のことを学ぶんだらうなというふうに言っていて、ああ確かになあってという感じに思った時がありました。

八万中学校 2年 f さっき部落差別について、学校で習うべきかみたいな話があったんですけど、学校の学年集会、学年で話し合う場があって、その時も部落差別とか人権学習についてするべきかみたいな話し合いになったことがあったんですけど、その時に講師、お話をしに来てくれていた人が、涙を流されてお話をしてくれて、差別があったという事実を伝えていってほしいっておっしゃって、差別を受けたことがある人が伝えていってほしいって一人でも思っているなら、伝えて学習していった方がいいのかなって思いました。



松茂中学校 3年 a 部落差別って私は中学生で初めて聞いた言葉で、前も言ったけど、お母さんとかに聞いてもあんまり分からないってなってる。部落差別ってあんまり伝えられてきてないって言ったらあれやけど、あんまり自分の周りには部落差別っていう考え方がなくて。自分が部落出身だったら、もっと考えよったと思うし、周りに部落っていう考え方がないから、もうちょっと早い段階、小学生ぐらいの時から部落差別とかLGBTとかの問題について考えてきた方がよかったのかなと

思いました。



吉野中学校 3年 j ボクは、城ノ内中等教育学校のa dさんの作文を聞いて、やっぱり自分を見つめることは、すごく大事だなと思いました。ボクの学校では前、産婦人科の方が来てくれて、出産の話をしてくれた時に、生きているだけで100点満点という言葉を書きました。ボクは、その言葉を聞いて、自分が今生きていることがすごいありがたいことで、今までのことに感謝する必要があるんだなと思いました。



大麻中学校 3年 k 城ノ内中等教育学校の「哲ちゃんの生き方をまなんで変わったこと」のはじめのところで、自分が嫌いだと言って、友達をうらやましく思ってしまう自分が嫌いって言ってたけど、それは人間がもっている弱い心が生み出してしまう気持ちなので、そういう自分が嫌いって思える自分自身は強い

気持ちをもっているんだなと思ったので、私自身も強い気持ちをもてるようになりたいと思いました。



吉野中学校 3年 | ボクは松茂中学校 3年の a e さんの「部落差別について」という作文を聞いて、ボクの学校でも人権学習で部落差別による結婚差別について習って、その結婚差別の物語でも、同和地区の人の話が出てきたりして、主人公の両親がとても反対するっていう物語なんですけど、そこにもよくない慣習みたいなものがあるのかなと思いました。ボク自身もそういう慣習はなくしていきたいなと思っています。



大麻中学校 3年 m 小学校の時にいろいろな講師の方が来てくださって、よく話を聞かせてもらっていたんですけど、小学校の時はあまり深く考えれずに、1年を過ごしてしまったことがよくあって、中学に入ってからこう

いう人権に初めて入って、毎年人権劇とかをしてきていて、本当に人権のことを詳しくやっている学校なんですけど、やっぱり自分の中の、a d さんが言っていた自分の弱いところを人間はもっているんで、そういうのも見つめ合うのも含めて、こういう人権の中の集会を開いて参加できたことがよかったなと思いました。



司会者 g さっき言っていた人権劇って、たとえばどういうのをしているんですか。

大麻中学校 3年 m 大麻中学校の人権の劇は、今だったら新型コロナウイルスによる誹謗中傷の話だったり、あとは、いじめとか身近なところにあるような問題について話し合ったりするような劇です。

司会者 d 立て続けに質問がいくつかあるんですけどいいですか。人権劇があるっておっしゃってたんですけど、人権劇って具体的にどのような人とか組織が行うものなんですか。たとえば人権委員会であったり、クラスでやるとか学年でやるとか。

大麻中学校 3年 m 生徒会実行委員や人権委員が中心となって、3年生が主に劇の中に出てやっています。

司会者 d 人権劇を行う時期とかはいつです

か。



大麻中学校 3年 m 秋に行われる文化祭や人権フェスティバルなどのイベント、行事の中でやっています。

藍住中学校 1年 i さっき弱いといけない、他人をうらやましく思うとか、そう思ってしまふ弱い自分がある、それをなくしていきたいと言ってたんですけど、私は、そういう気持ちがあってこそ人は成長できると思います。さっきの作文で言ってくれていた桜井さんの、周りがマイナスに思ってしまうことでも、さっき作文で言ったように、プラスに桜井さんは考えているので、自分の弱いところもプラスに考えれるってことも、プラスに考えてもいいんじゃないかと私は思いました。



松茂中学校 1年 n 2回目に発表してくれた「想いを受け継いで」っていう発表の中に曲をつけた人が、30年前にその人が知って曲を

つけたと言っていたから、30年前、もっと前かもしれないけど、そういう時から差別があるということが世間に知られていたのに、何でなくなっていないんだろうなってさっき考えてたんですけど。みんなが発表していたところで、自分の弱いところっていうのが出てて、自分の弱いところがあるから自分以下を求めんじゃないかなというところに行き着いて。じゃあ自分の弱いところをなくせばいいということになるんですけど。自分の弱いところっていうのは、なくならないというか、誰にでもあると思うので、一人一人が差別というか、そういうことを日頃から心がけていけば、いつかは分からないけど未来に残していかないでいける社会になるんじゃないかと思いました。



松茂中学校 3年 d 自分は、少し前までは部落差別っていう、その言葉自体知らないような人間だったんですけど、中学3年の人権学習になってから部落差別についてもより詳しく教えてもらえるようになって、考えれるようになって。それで部落差別について1回親に聞いてみたんですよ。前々から部落があったのになぜ今もなくなっていないのかって。親に聞いたたら、これはあくまで親の一個人の意見なんですけど、昔はそれが普通だった。住んでいる所によって差別的な意見をもつてというのが、それが普通で常識だったから。今のみなさんも1個常識、普通にあるじゃな

いですか。今自分の知っている常識が、知らん間にちょっと経ったら、それが差別やなんやとやかく言われる時代になり得るかもしれんしね。何が言いたいかといたら、たとえば、その、部落差別自体がなくなったとしても、また時間が経って、人の価値観が変わっていったら、1個の差別がなくなっても、また新しい差別が次に出てくるんじゃないかなって思います。



吉野中学校3年 j 今、司会者の方が言ってくれたように、言ってくれたことを踏まえてボクも、昔は慣習だった部落差別が、今になっていけない、なくしていこうとなっているので、今ある慣習も、いつなくそうってなってもおかしくないんじゃないかなって思いました



大麻中学校3年 m 司会者が言ってくれた意見に対して、人のちょっとした価値観の違いでまた違った差別が出てくるっていうのを聞

いて、やっぱり、もう差別はなくならないのかなって、ちょっと内心思ってしまったところがあって。ただ、なくならないからと放っておくわけにはいかないし、それだったら自分の中でちょっとした意識を変えることとか、こうやって学んできたことを友達とか身近にいる大人とかに、ちょっとでも考え方を広めていけたらなと思いました。



OG ○ 一般で参加させてもらっている○という者です。差別がなくなるかなくなるかみたいなのがでてきたんで、ちょっと発言したいなって思ってマイクを持たせてもらっています。

差別がなくなるのかなくなるのかでいえば、私はなくなるとは思いません。でも、差別がなくなるかなくなるかでいえばなくなるとは思うんですけど、差別っていう言葉に含まれている意味合いの中に、私たちがここで話し合っている差別って、みんなの中で共通理解みたいな感じで行われている差別、一般的に○○差別っていう言葉って、結構知られたりするじゃないですか。それに関して、たくさんの方が差別をしている、人それぞれ差別意識とか物の好き嫌いとか、好き嫌いとかはけっこう差別とかにつながってくる部分があると思うんですよ。差別っていうもの自体はなくなるかもしれないけど、共通理解でいろんな人が1つのものに対して差別をする、それが目に見える形になって現

れるっていうのが、私たちがなくしていきたいと思っている差別なんじゃないかなって思うんですよ。なので、一つのものを迫害する、拒絶する、排除するみたいな方向にもって行かれる差別、行為をなくしていくっていうのが、私たちの目指している差別をなくすってことなんじゃないかなと思いました。



藍住中学校 1年 i 私もさっき言ってくれたように、差別はなくならないと思います。差別って部落差別とか、たぶん人の周りにいる人たち、どんなに仲がよく、どんなに同じ時間過ごしてきても、考え方が違うから起こるんだと思います。私の家族、お姉ちゃんはコミュ症で、よく一緒にいる時にいろんなグチを話してくるんですが、絶対あの人に嫌われたとか、絶対あの人とか…。周りにいる人たちが何を思っているのか分からないから、私も人見知りのところがあるんで、絶対この人、多少嫌っているんじゃないかとか、そういうのを想像したりして。差別も同じように勘違いとかそういう見えない心の動きで差別とか起こるんじゃないかなって思うんで。さっき言ってくれたように差別意識を薄めていったらコミュ症な姉もやっぱり少し楽になっていけると思うし、人って誰が何考えとか、考えているとか分からないんで、周りが統一していったら少しは心が楽になっていくんじゃないかって思います。



八万中学校 3年 p 差別ってやっぱりなくならないと思うんだけど、俺も。でも、なくならんけんいいやじゃなくて、やっぱり自分の中では差別はやらんところって決めとくんが大事なっちゃうかなって思いました。



松茂中学校 3年 d さっき一般の方が言ってくださったことについての意見なんですけど、確かに差別そのもの自体は、自分もなくなるものではないっていう意見はもっているんですよ。差別ってものによるんですけど、一種の嫌悪感、見て嫌な気持ちになるとか、そういう感情からきているんじゃないかなって思っているんですよ、自分は。その嫌悪感っていうのはたとえば、何か虫とか、虫見てちょっと気持ち悪いとか、食べ物でいったらこの食べ物ちょっと嫌いとか、そういう嫌悪感があるんですけど。その嫌悪感がある限りは、差別って絶対なくならないとは思

うんですよ。嫌悪感があるから差別が起こるけど、その嫌悪感がなくなると人って生きられない、身を守るために自分に害を与えるものなんか判別できないから。何が言いたかったら、嫌悪感があるから差別がある、嫌悪感がないと人は生きられない。だから差別がなくならないんじゃないかなみたいな意見をもっている。以上です。



藍住東中教員 平野 今、差別がなくなるか、なくならないかの話になっているのかなと思いつつ、自分の心情を言っているんですか。差別はなくなるもんだと思っているんですよ。差別はなくなるもんだと思っています。この世から人間が作り出したものは、どんなものであっても壊れてなくなって、最後は、ボク、理科の人間なので言うと、未来永劫あるものは絶対にないので、いずれ崩れるし、なくなると思っています。で、今の話を自分なりに解釈したらどういうふうに、言葉足らずのところを自分の中で補いながら考えてたら、こういうことちゃうかなと思いました。何かというと、差別がなくなるのではなくて、自分たちがある、ボクたちが小学校の時とか中学校の時に経験しなかった、経験してたんですけど、それが差別って気づけなかったこととか、差別だと分からなかったことが、時代とともに、あっ、これってこういうところが人の生き方とか、人権を侵害している部分なんだよって、よりはっきりと分かるよう

になってきて。で、それが、これは差別ですよっていうのが、自分の目の前にはっきりと示されるように社会がなってきたと思うんですよ。思うんです。だから、差別がなくなっていくっていうのではなくて、自分の中でいろんな差別意識に、自分たちが気づき出していったから、ああ、これも差別か、あれも差別か、あっ、これも差別だよっていうふうにどんどんどんどん気づいていけばいくほど、差別って自分の中でいろんな形で増えていくじゃないですか。今までだったら障がい者差別のことばかりを勉強してきて、障がい者差別って駄目なんだよねと思っていたけどそれを軸にして、その人達の人権は守られている、この人達の人権は守られてないよな、この人達もそうだよな、この人達もそうだよなっていうふうに、どんどんこう、いろんな立場の人のことを考えていくと、どんどんどんどん、差別ってこんなに世の中にたくさんあったんやって気づいていって、で、ああこれはどんどんなくなるけども、新しいこういうことが差別ってことに自分気づけたよなって。確かにそれは、それに関しては自分は、ああ過去にできてないなあっていうふうに落胆する部分があるんやけど、ああこれから気をつけようって思うことがあるんやけど、気づいたその日から自分の中では差別なくせるかなと思ってます。だから、差別なくせるなくせないじゃなくて、新しいキミたちの新しい感覚で、これって差別なんちゃうんってい



うのが訴えかけられているから、差別がなくならないっていう感覚になるのかな、とか思いながら今聞いてました。それで部落差別が今のところ軸になって、何でボク部落差別がっていうんがあるかという、どう言うたらええんかなっていうのが常に自分の中にあるんです。目に見えて、こうだから差別受けてます、こうだから差別が残ってます、残っていることは分かるんですけど、こんな人たちがあんな人たちがっていう対象者っていうのが、自分もそうやし相手もそうやしって、ちょっと分からないっていう気が。もっと自分が勉強しないと分かりづらいところもあるかなとか思いながら、日々勉強しているのかなと思ひながら、この年になってもまだ、どういふうな差別の終わり方をするんだろかと思ひながら、どういふうに自分の中で解決していくんだろって思ひながらいる自分がいます。キミたちの新しい感覚でどれが差別なんか分からせてくれたらありがたいです。

OB q 我慢できんわ。(笑)板野中学校OBの**q**です。中学生集会、第1回の実行委員長をやりました。40歳になるおっさんです。平野先生が今言ってくれたことのちょっと補足でないけどさせてもらいたいな。補足というか自分が今まで言ってきたことなんやけど、子どもがおる時によ、赤ちゃんを抱きながら話しよるときがあつて。この赤ちゃんには差別、よう差別心とか、心つて書いて、人間生まれもってもつとんちゃうかとか。ほれをもつとんだったら、差別は多分絶対なくならんと思うんよ。もう差別心として生まれもつとつとんだったら難しいかもしれん。ただ、この赤ちゃんにはこ、ボクやは差別意識って言うんやけど、差別意識はありません。生きていく中でいろんな、それこそ自分と違う人のことをしたり、見たりとか、色が違うことを否定したりとか、そういういろんな情報とかが入ってきて、何らかの形で差別意識

って生まれてくる。これが成長するにつれて、自分が差別してしまいよること気づかんまま大人になっていってしまうことがあると思うんです。今日、話聞つきよって、正直言うたら途中で泣きそうになってきて、何でかっっていうたら、部落差別の問題ってここまで衰退っていうか、衰退したんやなってほんまに悲しいなって、ちょっと思ってしまった。まあ、ボクも部落の人間なんやけど、第1回目の時の中学生集会って、もうほとんど、ほぼ部落の、部落地域に生まれた中学生が集まって、部落差別問題中心にして話し合いが行われてきました。何で部落差別中心なんかっていったら、いろんな人種差別とかいろいろあるけど、部落差別は日本固有の、独特な問題であつて、一番身近な問題なんよな。今の子は、親が差別されてきたとか、自分が差別されてきた体験がなかなかないかもしれん。逆にボクが思うんは、また隠されてきよんかなって思う。たぶん、ほんまに自分のルーツとか調べていったら、自分は部落の人間だっ



たなつていふうんが分かることがあると思う。その中で差別受けた子やが、何で差別されなあかんのか。ボク自身もいろいろ高校生友の会だつたりとか、青年になつても地元で青年部長とかしよつて、それなりに勉強はしてきたけど、部落差別が何でできたかといふうんは、もう迷宮入りで分かりません。起源説はいろいろあつて分からんのかな。なんで残つともうそうやし、なんであんまり表だ

ってされんのかっていうたら、ものすごく深いです。部落差別問題というのは。一言で部落差別問題こうですってというのは、簡単なところで言えば、生まれたところで差別されるっていうことやけど、それくらい根深いもんやし、いうたら毛嫌いされてきたことやし、聞いたところで関わりたくないから知らんとかいうんが現状です。ボクやの時代は、これが国の政策として部落差別をなくしていこうという運動が高まっとった時だって、ボクや終盤の方やけど、かろうじてぎりぎり学校とかでもされてきた年代だって、今はもう、昔の言葉で言えば寝た子は起こすなっていうことがあるんやけど、それはもう内内のことにしていこう、触れんようにしていこうっていうのが現状なんかなあって思って。ものすごく悲しい。ごっつい泣きそうになりました。ほんまに身近に部落の子とかおるんよな。で、これに悲しんどる子もおるし、その子の思いを聞いて周りの子が、部落でない子やも「ほら、腹立つわ」って「そんな思いしたら腹立つな」とか怒りとか悲しみをもって「あつ、ほな俺は差別なくしていかなあかん」っていうのがあったと思う。ほれを軸にして、そういう思いを聞いて、そういう思いを知ったうえで語り合っていく、仲間をつくっていくっていうんが理想であって、それで他の人種差別なり、ハンセン病なり、身体障がい者の差別したって、実際にそうやけど仕組みがよう似るところがあるんよな。それを分かった上でいろいろ話し合いをしていった。部落差別問題を中心にしていってっていうんがあるんよな。ほんまに一番身近な問題なんで、これから、ちょっと、もうちょっと先生が力入れてもらって、勉強してほしいなと思って思いました。長くなるのでこれで終わります。

司会者 他に意見ある方いますか。ないようであればこのまま休憩をしたいと思います。

このあたりで午後の部Ⅰの話し合いを終了

し、10分間の換気と休憩をとりたいと思います。10分後には、元の席に戻ってきてください。

